

『ノルマ』に於けるケルト

五 島 正 夫

序

ヨーロッパの文化はギリシャ・ローマ神話（宗教）、キリスト教、それにケルト神話（ドルイド教）の三本柱の上にあるというのが筆者の持論である。特にケルト文化はヨーロッパの人々にはあまり評価されず影の存在であつた。だが、イギリスの詩を研究するにつれてケルト的なものが、あまりにも大きな魅力を与えて、仄かに輝いていることに気付いた。既に、ケルトのキリスト教化については述べている¹⁾ので、ここではケルトのローマ化だけに触れることにする。

ベルリーニ（Vincenzo Bellini, 1801～35）のオペラ『ノルマ』（*Norma*, 1831）を取り上げたのは、既にローマの支配下にあったケルト人たちのドルイド信仰の末期を背景に、ドルイド教の最高の尼僧ノルマ（神意を聞いて教徒たちに伝える祈祷者、医術者、占星術師あると同時に、政治、法律、裁判などの一切の権力を備えている。）とローマの地方総督ポリオーネ、それにノルマの配下の若い尼僧アダルジーザを含めた、ケルトとローマを際立たせている人物設定がされていることである。台本は当時イタリア屈指のオペラの台本作者であるフェリーチェ・ロマーニ（Felice Romani, 1788～1865）によって書かれたものである。オペラの性格の上から観客受けを狙った面もあるが、当時の記録を綿密に調査、研究している点んからも取り上げる価値があると思『ノルマ』の構造は序曲を伴った2幕5場に分けられている。以下概略を述べる。

『ノルマ』概略

紀元前50年頃、共和制のしかれていたローマのガリア地方ベルギー、フランス、ドイツの一部にまで勢力をはっていたガリア人、即ちゴール人は、史上有名なガリア戦争によってローマの侵略を受け、その領域はローマの支配下に陥り、ローマに対して心ひそかに報復の時を窺っていた。

第一幕第一場 ガリア人たちが信奉しているドルイド教の聖地の森。真夜中。一本の檜の木の大枝の下に飾られた石の祭壇の傍ら。高僧オロヴェーソに率いられたドルイド教徒たちは、ローマの破滅を祈るためにこの森に集まってくる。彼等がひとまず姿を消すと、そこにローマの総督ポリオーネが隊長で腹心のフラヴィオを連れて登場、カヴァティナ「ヴィーナスの祭壇に私と共に」を歌って心の悩みを告白する。ポリオーネは、オロヴェーソの娘として尼僧の最高の地位についているノルマと契りを結び、ノルマも尼僧としての純潔の誓いを破ってポリオーネとの間に二人の子供をもうけていた。しかし、ポリオーネの心はすでにノルマから離れて、今では若くて美しい尼僧アダルジーザに向けられている。やがて遠くで響く銅鑼を合図に人々が再び祭壇のほうに向かってくる。ポリオーネとフラヴィオは退場、人々が集まったところへ頭に神聖な花冠をつけたノルマが姿を現、祭壇に上がって血気にはやる人々を鎮める。オロヴェーソは彼女の態度を訝がるが、ノルマは、「私は、天の秘められた書物から、読み取った。その死の頁の中に、高慢なローマの名前があったのだ。かれらは、お前たちの手が下らずとも、滅びる。かれらは、みずからの悪徳によって、滅びてしまう。その時をまつのだ、神によってきめられたその運命の時を。もうしばらく、騒ぎを起こすのではない。私は聖なる寄生木を刈ることにする。」と神託を述べる。式を終えて一同が退場したあと、アダルジーザが一人残って祭壇に祈りを捧げていると、ポリオーネが登場。二人でローマに行って幸せに生きよう、と言葉の限りをつくしてアダルジーザを口説く。彼女もその熱意に打たれて、明日再会したうえで一緒に逃げることを約束する。（斜体筆者）

第二場 暗い洞窟の中にあるノルマの部屋。奥にはポリオーネとの間にできた二人の子供がかくまわれている。ポリオーネの愛が薄れてきたことを悟ったノルマが悲しみに沈んでいると、アダルジーザが訪ねてきて、信仰をすてて愛に走るようになった自分の悩みを告白する。ノルマは我が身にうつして自

分もまた同じ罪を犯していることを考え、アダルジーザの過ちを許そうとするが、そこえポリオーネがやってきたことから、アダルジーザの恋人が他かならぬポリオーネであることを知って、ノルマはポリオーネの不実を呪う。

第二幕第一場 前場と同じノルマの住居。ポリオーネとアダルジーザに裏切られて絶望したノルマは、眠っている子供達を殺そと短剣を握るが、母性愛に阻まれてその手を下ろすことができない。アダルジーザを呼んで、子供を育てて欲しいと頼むが、アダルジーザは「ご覧ください、ノルマ様」といって子供を手放さないことお嘆願し、自分もここに残ってポリオーネの愛が再びノルマの手に戻るように努めることを約束する。

第二場 ドルイドの森の近く。ドルイド教徒の僧侶やガリアの兵士たちが神の指示を仰ごうと集まってきたローマを倒す誓いを新たにす。

第三場 イルミンスル神殿の前。アダルジーザはノルマを救おうとポリオーネのもとへ行ったものの、ポリオーネはもはやノルマのもとに戻ろうとはしない。それを知ったノルマは今こそ戦いを始める時、と合図の盾を打ち鳴らす。その時、神殿に忍び込んだ一人のローマ人が捕らえられてくる。アダルジーザを連れ出そうとしたポリオーネである。人々は彼を生け贄にしようとするが、ノルマは人々を去らせた上でポリオーネに、自分がまだ彼を愛していることを語り、アダルジーザを諦めてガリアを離れるならば命だけは助けようと訴える。しかしポリオーネは、アダルジーザを救っても自分を刺せ、と鋭く言うのでノルマは嫉妬に燃え再び人々を呼び集める。そして神聖を犯した一人の尼僧を神に生け贄にすると告げた後、火刑台の用意をさせ、その罪深い尼僧こそ自分自身に他ならないことを告白する。これを聞いたポリオーネもまた、はじめてノルマの深い愛に目覚め、ノルマと死を共にすることを誓う。ノルマは改めて自分の犯した罪を告白、父親オロヴェースをはじめ、人々の涙のうちにポリオーネと共に火刑台に歩みをすすめる。

ケルトの宗教（ポリオーネー愛、ノルマー怒り）

この『ノルマ』に於いてはローマの宗教、ケルトの宗教と言うよりも「愛憎」が顕著に現れている。その台詞を台本から抜き出してゆきたい。

Pollione：（アダルジーザに対しての台詞。）

You pray

To an atrocious god, foe of your desire,

And of mine. O beloved, your God

Should be the God of Love. ²⁾

お前が祈っているのは、

邪悪な、ほくたちの望みを妨げている神なのだ。

おお！ 優しい人よ、おまえの神様は、

愛の神だけなのに。

Pollione：（アダルジーザに対しての台詞。）

You will come with me.

Love is more sacred than your rites -

Yield to Love, ah, yield to me ! ³⁾

ほくと一緒に行くのだ。

お前たちの儀式より、愛ははるかに神聖なのだ……

愛に従うのだ。 ああ！ ほくのいうことを聞きなさい。

Pollione：（アダルジーザに対しての台詞。）

Come with me to Rome, O my love,
For there is love, and joy, and life ;
We shall vie with each other
To know the greater joy in life.
Do you not hear a voice in your heart
Which promises eternal happiness ? ⁴⁾

ローマと一緒にいこう。おお！ 愛する人よ。
そこには、愛が、喜びが、生命がある。
そこで、一緒に味わおう、
もっと大きな喜びを。
常に変わらぬ幸せを約束する声が、
お前の心には、聞こえないのか？

上記3つの引用はポリオーネの野蛮で血腥いケルトの宗教に対する増悪とローマの愛の神の対比が描かれている。

Noruma：（ドルイド教徒たちへのお告げと独白。）

Yes, he shall fall. I can punish him –
（But my heart can never do it.
Ah ! bring back to me
The beauty of our first love.
Then, against the world itself
I shall be your defense.
Ah ! Bring back to me
The peace and warmth of love,
And in that love I shall find again
Life, fatherland and heaven itself !) ⁵⁾

ええ、わたしが罰しましょう……
（でも、わたしにはできない。
ああ！ あの愛の喜びに満ちた、美しい時が
わたしに戻ってきたら
あなたを、どんなことをしても、まもってさしあげるのに、
ああ！ あの優しく温かい愛が帰ってくれば、
あなたの心に、命を、故郷を、そして天国を、
見出だす事ができるでしょうに。）

ポリオーネに対するノルマの揺らぐ本当の気持ちが述べられている。

Norma：（ポリオーネに対しての台詞。）

Leave me, yes, worthless man !
 Forget your children, your promises, your honour.
 Cursed by my disdain, you will find
 No joy in your sinful love –
 Over the seas, borne on the winds,
 My burning hatred will pursue you.
 Night and day my fury
 Will rage around you – ⁸⁾

行け、いいか、愚か者！
 お前の子供も、誓いも、誇りも、忘れてしまうがよい。
 わたしの恨みに呪われて、お前の罪深い愛には、
 決して喜びがないだろう……
 たとえ海の向こうだろうと、風に乗って行って、
 わたしの燃えさかる憎しみは、きっとお前に付きまとう。
 夜でも、昼でも、わたしの幻は、
 お前のまわりで、暴れまわるのだ……

Norma：（ポリオーネに対しての台詞。）

The traitor would go too far.
 But my vengeance will strike first –
 And blood – Roman blood – shall flow
 like water ! ⁸⁾

あの裏切り者は、そんな事までしようとしたのか。
 だが、真っ先に復讐してやろう……
 そして、血を、ローマ人の血を、
 滝のように流してやる！

上記のノルマのポリオーネへの憎しみはケルトの残酷さを現し、またポリオーネのアダルジーザへの言葉はローマの愛の神を象徴するかのようである。

Your pyre, O Norma, is mine.
 There beyond, purer, holier,
 Begins eternal love ! ⁸⁾

ノルマ、火刑台と一緒に登ろう。
 そこを越えたところで、もっと清らかな、もっと尊い、
 永遠の愛がはじまるのだ！

オペラの最後で二人とも火刑台に導かれて行き悲劇が完結する。ケルトの立場から見ればハッピーエンドの劇となろう。なぜならば、これはケルト民族の彼岸の世界そのままであるからである。霊魂は不滅であり、死んだ後は別の体に移って再生すると言う、生と死の明快な境界のないケルトにとっては、上記結末の引用はノルマとポリオーネの新しい出発と、とらえられるのではないだろうか。ポリオーネの愛

の葛藤は突如としてポリオーネのケルト化で幕が閉じられているように感じられる。お互いの神を裏切り結ばれ、憎しみ、ケルトの世界でまた結ばれるという図式が成り立つのではないだろうか。実際、ローマ兵のドルイドへの改宗も多々あったと言われている。『ノルマ』のみで結論を出すわけにはゆかないが、ケルトのローマ化は、キリスト教化よりも悲惨さの多いことが想像される。キリスト教に在っては、東方系の司祭をブリテン島やアイルランドに派遣して徐々に教化を促進したように思える。

ローマの主神ユピテル（ギリシア神話のゼウス）は雷神の異名を持つほど権力のある力強い神であるが、奥さんのユノ（ギリシア神話のヘラ）は嫉妬深い、これはとりもなをさず、ユピテルの浮きが原因である。ローマ帝国が領土を拡大して、その土地の人々を平定するのにまず「力」（軍隊）を用いた。次に、その地域の神とユピテル神の血縁関係を結ばせたり、その地域の神は昔からユピテル神の子供であつたことにした。ローマの人の勝手な策略のためにジュピター神に浮気をする神の名が付加された事からもケルトのローマ化が想像される。

プリニウスとカエサルスのケルト

1幕の第1場にはケルトの特色が濃く出ているので、ここを中心に述べて行きたい。既に概要で示したように1幕の第2場はドルイド教徒たちの神聖な森、中央に寄生木の生えた樫の木。その下に、祭壇として、ドルイドの石が置かれてある。遠くに、緑深い丘が見えている。夜、木立ちの間に、たいまつが明りが見え隠れしている。ここがノルマがローマの駐留軍と戦うか否かの神託を下す場所である。この描写は、プリニウス（Plinius, 23-79）の『博物誌』の記述と一致する。他の言い方おすればローマには『ノルマ』の台本を『博物誌』を資料として書いたといった方がよいだろう。『博物誌』には、「ガリアにおけるヤドリギの崇拜」が詳細にのっているので引用してみたい。

ヤドリギについて述べるとき、ガリアの諸属州においてこの植物に対して示される尊敬を省略するわけにもいかない。ドルイド——これは彼らがかれの魔術師をよぶ名前である——はヤドリギとそれが宿っている木よりも神聖なものはないと考えている。ただそれはカシの森はそれ自体として選ばれる。そして魔術師はそういう森を用いずに儀式を行うことはない。そこで彼らが「カシ」を意味するギリシャ語からきたドルイドという名前を得るのは、この習慣からであると想像されるであろう。さらに、カシの木に宿っているものはすべて天から送られたものであり、その特定の木は神自身によって選ばれた印であると、彼等は考えている。しかしヤドリギがカタガシにはえているのはめったに見られない。そしてそれが見つかる、それは盛大な儀式をもって採取される。そして月の第6日（それはこれら諸種族にとって月および年のはじめをなすのである）にそして新世代が30年経つごとにである、というのはその時でもそれは強さが増しつつあり、生長し切った大きさの半分もないからである。「あらゆるものを治癒する」という意味の土地の言葉で月を歓呼しながら、彼らはある木下での生贄の式と饗宴の準備をし、2頭の牡牛を連れてくる。その角はこのめでたい折りに初めてくられる。白い法衣を着飾った1人の僧侶がその木に、金色の鎌でそのヤドリギを切り落とす。するとそれは白い外套の中に受け止められる。それから最後に、それを賜った人々は情深い賜物を授けられるように神に祈りながら生贄を殺す。彼等は飲み物に入て与えられたヤドリギはどんな不妊の動物にも生殖力を与え、そしてそれはすべての毒に対する解毒剤だと信じている。しばしば多くの民族の間に威を振っている、つまらぬものについての迷信はかくも力強いものである⁹。

『ノルマ』の台本には、「尼僧たちを従えて、ノルマが出てくる。髪の毛の乱れた頭には、うまつずらの冠がのせられている。その右手には、金の鎌が握られている。……ノルマは、鎌で、やどりぎを刈る。尼僧たちは、それを、かごに拾い集める。前に進み出たノルマは、輝きをました月が光を投げる空に向かって、手をさしのべる。全員が平伏する。」（……部は前記『ノルマ』概要の斜体部分を参照）という描写があるが、まさにプリニウスの描写そのものである。また、カエサル（Julius Caesar, 100-40 B.C.）

『ガリア戦記』の中にも多々ケルトへの言及がある。これらの本が『ノルマ』の台本の資料となつたのは間違いない。ただ言える事はローマ側から見たケルトという側面は免れない。

結 語

『ノルマ』の題材になっているのは、古代の西ヨーロッパに広く分布していたケルト民族（フランスではゴール人、イタリアではガリア人と呼ばれていた）の間に信仰されていたドルイド教である。『ガリア戦記』で述べられているように、ケルト民族の野蛮さ、邪悪な宗教としてのドルイド教はカエサルの政治的立場や誇張を含んでいるもののおおむね真実と思える。大カート（Marcus Porcius Cato, 234-149 B.C.）は

Pleraque Gallia duas res industriosissime persequitur, rem militarem et argute loqui.¹⁰⁾
「ケルト人が心を注ぐものに二つある。それは戦争の技と言語の巧緻である。」

と述べているが、それはまさしくケルトの本質を突いた言葉である。このケルト民族はローマ人、ゲルマン民族、さらにアングロ・サクソンに押されて、アルプス山中、フランスのブルターニュ、イベリア半島、ブリテン島等の自然環境のきびしい豊でない土地に追われていった。そして常に敗戦の悲愁を味わい続けたその言語は憂鬱と悲哀に満ちたものであり、想像性に富み、夢幻的なものになった。「言語の巧緻」はローマ人の侵略から千五百年にも及ぶ敗戦と逃亡の生活の中で悲愁を味わい続けたその言語はさらに憂鬱と悲哀に満ちたものになり、想像性に富み、夢幻的なもの、いわゆる「ケルト的気質」に結晶したと言えよう。

特にスコットランドの高地地方で話されている、優しい調べのケルトの言葉をゲール語と言うが、ゲールとは風を意味している。言葉を越えてその旋律は我々日本人の琴線にも触れるのである。ベルニーニの音楽を深く研究したワーグナー（Richard Wagner, 1813-83）の『トリスタンとイゾルデ』（*Tristan und Isolde*, 1865）のフィナーレに於ける殉死の場面や、ショパン（Frédéric Chopin, 1810-49）の『エチュード』（*12 Etudes*）op. 25の7などには、ベルニーニから受けた感化と影響が刻み付けられていると言われている。それはベルニーニの音楽に内在するケルトの音色なのではないだろうか。『ノルマ』そのものが劇的効果を狙ったものであり誇張もあるが、この『ノルマ』の中にケルト民族の悲劇の序章を見る感じがする。

Notes :

- 1) 拙論, 「ケルトの心」『神奈川歯科大学基礎科学論集』 第10号 pp.70~78.
- 2) Bellini, *Norma: Libretto* (London: EMI, 1985) (以下この本から英語訳で引用します。)
- 3) *Ibid.*, p.41.
- 4) *Ibid.*, p.43.
- 5) *Ibid.*, p.35.
- 6) *Ibid.*, p.63.
- 7) *Ibid.*, p.81.
- 8) *Ibid.*, p.111.
- 9) プリニウス, 中野定雄他訳『プリニウスの博物誌』第Ⅱ巻（東京：雄山閣, 1986年）, p.704.
- 10) Marcus Porcius Cato, *Origines* (Paris : Société D'édition, 1986), p.21